

卷

頭

言

『夢中になれること』

さいたま市教育委員会
管 理 部 長 小 勝 伸 嗣

「もう寝るか」と、隣の A 氏が言った。

1976年12月末、私達は北アルプス鹿島槍ヶ岳東尾根第一岩峰の基部で、頂上を目指すためのテントの中にいた。その夜は寒さもきつく、雲が切れると満天に星々が輝いていたことを記憶している。

当時、まだ新米職員だった私は、山登りに夢中だった。やがて、家庭をもったこともあり、40歳を過ぎた頃から山とは次第に疎遠になってしまった。それでも何とか時間を見付け、山行を重ねたことにより、チームワークの大切さや的確な状況判断の重要性を知り、さらに頑張り続ける精神力も養われ、私の人生観や仕事に対する姿勢などに少なからず影響した。また、優しく厳しくもある大自然の中で時間を共有し合った、あの A 氏を始めとする掛けがえのない友をつくることもできた。

先日、古都奈良を旅したときに訪れた「新薬師寺」で中央の薬師如来とまわりの十二神将を拝したあと、ふと、薄暗い本堂の天井を見上げたときのことだ。あの厳冬の山で見た満天に輝く星々を彷彿して、山に夢中だったかつての自分を思い出し、その頃のことを今の私に色々と生かされていることを改めて実感した。

今日のように、多様な選択肢があり複雑化した社会では、一つのことにも夢中になることはなかなか難しいことであろうが、将来を担う子どもたちには、ぜひ夢中になれるものを見付けてもらいたい。それが一人ひとりの可能性を開花させ、もっている能力と結び付くならば、どんなに素晴らしいことか…。

そんな私も、団塊の世代に生まれた一人として、これからの人生を想うとき、いつまでも生き生きと輝き続ける人間でありたいがために、何かに夢中になれることをと、じっくり考えるようになった。